

火山噴火が狩猟採集社会に与えた影響：鬼界アカホヤ噴火を中心として

栞畑，光博

<https://doi.org/10.15017/1440989>

出版情報：Kyushu University, 2013, 博士（比較社会文化），課程博士

バージョン：

権利関係：Public access to the fulltext file is restricted for unavoidable reason (3)

論文審査等の結果の要旨

桑畑光博の学位請求論文は、日本列島における完新世最大の火山噴火である鬼界カルデラ噴火による南九州の狩猟採集民とその社会に与えた影響を考古学を中心に解明したものである。

本論文は6章よりなり、第1章では研究史を整理する中で問題の所在を明らかにしている。第2章では、鬼界アカホヤテフラ (K-Ah) の年代を水月湖の年縞年代と K-Ah 層準の ^{14}C 年代 (年輪較正暦年代) により、現状で較正暦年代が、200~7,300 cal BP の間、5,300 cal BC 前後であることを確認している。そして、K-Ah とその下位に堆積するローカルテフラの層位的発掘調査成果を用いて九州縄文時代早期後葉から前期の土器編年を再検討し、鬼界アカホヤ噴火災害による平橋式・塞ノ神式土器様式の壊滅という通説を否定し、K-Ah の降下以前には轟式土器という条痕文系土器様式に変化していたことをあきらかにした。そして、土器圏全体が鬼界アカホヤ噴火によって壊滅したということはなく、九州レベルでみたときに、土器型式を製作し継承していく人間の営みは途切れることはなかったと推定した。

第3章では、火山災害エリア区分論に基づいて、鬼界アカホヤ噴火による災害エリアを A~D の4つに区分し、各エリアにおける自然環境への影響と考古資料を分析して被災状況の復元と人類の対応について類型化した上で、鬼界アカホヤ噴火後に人類が適応不可となった、A・B エリアにおける再定住のプロセスを検討している。その結果、西之蘭式・轟B1式土器期 (5,350~4,900 cal BC) は、A エリア周縁部 (幸屋火砕流の北限ライン付近) にあたる複数の遺跡を除くと、他はすべてそれよりも北 (B エリア) に分布しており、いくつかの遺跡ではまとまった量の土器の出土が認められるだけでなく、集石遺構などの調理施設を伴っており、集落の定着性や継続性が看取されるのに対して、薩摩半島と大隅半島の南端部と大隅諸島においては遺跡の分布すら確認できないことをあきらかにした。轟B2式土器期以降 (4,900 cal BC 以降) は、南九州本土のほぼ全域 (A エリア北部) に遺跡の分布がみられ、大隅諸島の種子島においても土器が多量に出土したり、明確な遺構を伴ったりする遺跡がみられるが、薩摩半島南端部と大隅半島南端部、大隅諸島の中の屋久島ではこの時期の遺跡すら発見されておらず、明確な遺跡形成は曾畑式土器期 (4,300 cal BC) 以降であることを示している。また、南九州のほぼ全域において、西之蘭式・轟B1式土器期には、堅果類の加工具である磨石・石皿類の割合が極端に少ないという傾向が認められることから、K-Ah の影響によって、堅果類を生産する森林植生は相当なダメージを受けていたと推察している。そして、磨石・石皿類が増加し、森林植生の回復がうかがわれるのは、遅くとも轟式土器荘段階以降であると論じている。

第4章では、火山爆発度指数 (VEI) が鬼界アカホヤ噴火の約100分の1にあたる桜島11テフラ噴火や霧島御池テフラ噴火を比較し、火砕流到達範囲 (A エリア) と降下テフラが厚く堆積したテフラ現存層厚 30cm 以上の範囲 (B エリア) とともに鬼界アカホヤ噴火の約10分の1であること、鬼界アカホヤ噴火に伴う降下火山灰の分布範囲は噴出源から 1,000 km を超える範囲に広がる一方、桜島11テフラや霧島御池テフラの場合は降下軽石が主で、細粒火山灰はわずかであることなどから、降下テフラが軽石主体の場合、層厚が薄いと堆積はルーズで間隙が生じやすく、セメントのように地表を覆う細粒火山灰と比較すると生態系への影響は限定的であったと推定している。また、大隅諸島の種子島と屋久島とでは、鬼界アカホヤ噴火後の人類の再定住の開始に大きな時間差が認められ、同じ火砕流到達範囲内でも被害程度が異なっていたことを指摘し、高峻な屋久島と低平な種子島との地形環境の違いに起因すると考察している。さらに、大隅諸島、鹿児島湾岸部、宮崎平野部

では、海水準高位安定期にあたる西之菌・轟B1式土器期以降に貝塚の形成が断絶しており、K-Ahの二次堆積の影響によって、集落地至近の浅海域の埋積が進んだため、貝塚が形成されなくなったと考察している。

第5章と第6章では、平椀式土器期から塞ノ神式土器期の集落を形成した狩猟採集民の居住形態は高い定着性と集住性が看取されるのに対して、轟A式土器期の居住形態は移動性が高く散在的であることから、鬼界アカホヤ噴火の火山災害による社会環境及び物質文化環境への影響は、塞ノ神式土器期以前に比べるとそのリスクや社会的混乱のレベルが低かったと論じている。すなわち、農耕民と比べて狩猟採集民の空間利用は極めて可動的であり、状況に応じて集団や集落を移動させることは容易であり、鬼界アカホヤ噴火によって被災した地域を拠点的集落やキャンプ地としていた人々は、食料資源の状態を含めた生活環境の悪化に伴い、一時的に他地域に避難したり、生業テリトリーの変更を図ったりしたと論じている。

以上のように、本論文は、考古学的方法と関連分野の成果を駆使して、縄文時代における火山噴火とそれにともなう自然災害の影響を解明したものであり、先史時代研究および災害と社会変化に関する考古学的研究に大きな貢献をなすものと評価される。よって、論文調査委員会は、栗畑光博の学位請求論文は博士（比較社会文化）に十分は資格を有すると判断した。

試験又は学力確認の結果の要旨

甲 第 号 氏 名 桑畑光博

調査委員
主査 日中良之
副査 宮本一夫
副査 滑川厚司
副査 小山内啓人
副査 佐藤康也

試験又は学力確認の結果の要旨

学位申請者より提出された論文の公開審査を、平成 26 年 2 月 7 日 15 時から 17 時まで、比言文棟 321 号室において開催した。まず、申請者より約 40 分間、本論文の内容について説明を受け、その後、内容について出席者との間に質疑応答が行われ、その後調査委員が質問を行ったが、これらに対して申請者は的確に回答した。

以上の公開による発表ならびにその後の質疑応答の結果に基づき、申請者は、博士（比較社会文化）の学位を授与されるものとして十分な学力と資質を有すると判断された。よって、調査委員会全員一致で申請者が最終試験に合格したものと認定した。